ワールドカップ in 富士 報告

オリエンテーリングのワールドカップは西暦の遇数年に開催されており、世界の数カ国を転戦して、その総合得点で年間のランキングを争うものです。
ミレニアム開幕戦となる 2000 年の第1･2 戦が 4 月 15 日-16 日に日本の富士山麓で行われました。 オリエンテーリングのワールドカップが日本で開催されるのは今回が初めてでした。

当日はあいにくの雨模様でしたが、世界のトップランナーにはこんな天気もなんのその。霧雨に煙る幻想的な富士の大樹海を舞台に世界のトップランナーが大激突しました。

ワールドカップ、ミレニアム開幕戦は、個人戦となるクラシカル競技では男子はデンマークのアレン、女子はスウェーデンのエマが優勝を飾りました。
日本選手の成績は 男子が、38 位鹿島田浩二、40 位松澤俊行、41 位加賀屋博文、47 位高橋善徳、48 位柿並義宏、50 位新隆徳、女子が、36 位三好暢子、37 位金並由香、38 位小林啓恵、40 位落合志保子、41 位高野由紀、42 位田島利佳、の順でした。

また国別対抗のリレーでは男子がフィンランド、女子はノルウェーが勝利を収めました。 日本チームは男子で JPN1 チームが 11 位、JPN2 チームが 13 位、女子で JPN1 チームが 12 位、JPN2 チームが 13 位でした。

今回、フット O では初めてのカテゴリ A 国際大会でしたが、このために用意された地図とコースには日本最高、いや世界最高の調査技術が投入され、選手や各国の監督から絶賛されました。

ワールドカップクラシック結果

2000 年 4 月 15 日 静岡県富士市

男子

Rank	Name	Fed	Time
1	Allan MOGENSEN	DEN	1:16:16
2	Carl Henrik BJ RSETH	NOR	1:18:07
3	Janne SALMI	FIN	1:18:23
4	ystein KRISTIANSEN	NOR	1:18:38
5	Mikhail MAMLEEV	RUS	1:18:40
6	Jani LAKANEN	FIN	1:18:54
38	鹿島田浩二	JPN	1:33:41
40	松澤俊行	JPN	1:33:51
41	加賀屋博文	JPN	1:35:56
47	高橋善徳	JPN	1:46:55
48	柿並義宏	JPN	1:49:42
50	新隆徳	JPN	1:57:08

女子

Rank	Name	Fed	Time
1	Emma ENGSTRAND	SWE	1:02:19
2	Heather MONRO	GBR	1:06:41
3	Maria SANDSTR M	SWE	1:06:53
4	Hanne STAFF	NOR	1:07:42
5	Satu M KITAMMI	FIN	1:08:05
6	Jenny JOHANSSON	SWE	1:08:13
36	三好暢子	JPN	1:29:37
37	金並由香	JPN	1:29:59
38	小林啓恵	JPN	1:36:37
40	落合志保子	JPN	1:42:35
41	高野由紀	JPN	1:46:46
42	田島利佳	JPN	1:52:33

クラシカル表彰式

男子クラシカル優勝

アレン・モルゲンソン (デンマーク)

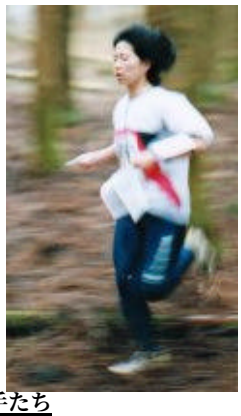
「1 番コントロールに向かうダウンヒルの部分で 30 秒程度の小さなミスをした。左方向にずれてしまった。しかしその後は集中力を持ちつづけることができ、レースが終わるまでミスしなかった。レース序盤で高いレベルの高い走りをするのは、とても難しいよ。」

アレン・モルゲンソン 32 歳。1993 年のクラシカル種目世界チャンピョンであり、1999 年のパークワールドツアーのチャンピョン。

今年最初のレースとある今日のレースでは、勝てると思っていなかった。彼の目標は 2000 年のワールドカップの年間ランキングで 6 位に入ること。

メンタルトレーニングはやっているの？ という質問に彼は表彰式でのインタビューでこう答えた。

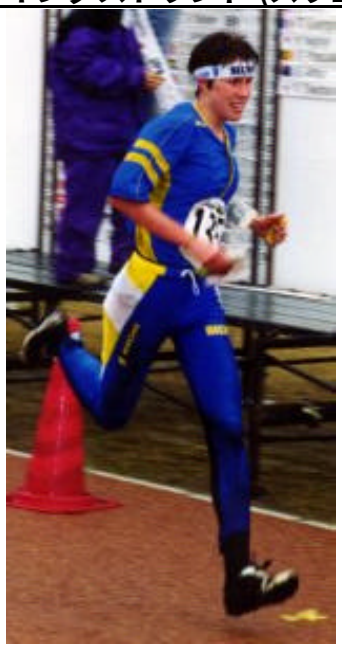
「特にやっていない。地図上でのトレーニングに集中している。」 （インタビュー：ヨルク・フィッテル）



森を走る選手たち

女子クラシカル優勝

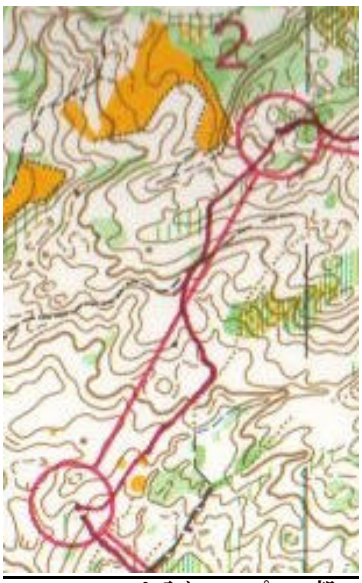
エマ・イングストランド (スウェーデン)



「良いレースで、まったくミスをしなかった。コンディションも良かった。このテレインは、いつも走っているスウェーデンより地面が柔らかかった。ちょっと走りにくかったかな。今日の地図とコースはとても良く、楽しかった。」

エマ・イングストランド 若干 22 歳。1999 年スウェーデン選手権のチャンピョン。 ワールドカップチャンピョンとなることは彼女の今年の目標である。

「来年の世界選手権に向けてもっと経験を積みたい。」（インタビュー：ヨルク・フィッテル）



エマのルート入りマップの一部

ワールドカップリレー結果

2000 年 4 月 15 日 静岡県富士市

オリエンテーリングのワールドカップ 2 日目、昨日の個人戦と同じく、富士山中腹の「子供の国」を会場としてリレー競技が行われた。競技は 1 チーム 3 名のランナー、各国 2 チームで行われた。
この日気温は 4.5℃。雨交じりの肌寒い天候だった。

男子リレーはフィンランドが優勝。
第一走者終了の時点ではスウェーデンチームがトップ。しかし第二走者でフィンランド 1 チームのヤンネ・サルミがトップに出て、そのままトップを譲ることなくフィニッシュ。スウェーデン 1、フィンランド 2 を 3 分引き離して優勝した。

女子リレーはノルウェーが優勝。
第一走者終了時点ではフィンランドがリード。第二走者ではスイスのシモーネ・ルーダが最速タイムを出し、デンマーク、ノルウェー1、スウェーデン 1、に遅れること 9 秒の 4 位に踊り出て、勝負は第三走者にもつれこむ。第三走者の無線中間地点では、スイスのブリジット・ウォルフと、ノルウェーのブリジット・ノルダールがレースをリードする。ブリジット・ウォルフのコントロールが少し短く、首位に立つ。しかし、ゴール目前の最終無線中継地点を前に、スイスのブリジット・ウォルフは痛恨のミス。約 1 分のパレレルエラーをしてしまう。これをついてノルウェーのブリジット・ノルダールが 1 位でフィニッシュし優勝した。ノルウェーチームは昨年スコットランドで行われた世界選手権でも同じメンバーで優勝している。

午後 3 時には雨は上がり薄日も差してきた。もう少し天気の回復が早ければもっと素晴らしいコンディションになったのに、残念である。
本日も併設大会が開催されており、リレーと同じ森を使用して行われ、約 1500 名が参加した。昨日の併設大会の参加者は約 700 名であった。

優勝したフィンランド男子

男子リレー

1	フィンランド 1	2:04:00
	Mikael BOSTR M	0:40:03
	Janne SALMI	0:41:19
	Jani LAKANEN	0:42:38
2	スウェーデン 1	2:07:00
	Niclas JONASSON	0:39:56
	Emil WINGSTEDT	0:43:16
	H kan ERIKSSON	0:43:48
3	フィンランド 2	2:11:50
	Timo KARPPINEN	0:40:26
	Petteri MUUKKONEN	0:44:36
	Mats HALDIN	0:46:48
11	日本 1	2:46:08
	松澤俊行	0:54:58
	鹿島田浩二	0:50:44
	藤城公久	1:00:26
13	日本 2	2:58:17
	加賀屋博文	0:48:25
	柿並義宏	1:10:16
	高橋善徳	0:59:36

女子リレー

1	ノルウェー	1:47:27
	Ragnhild MYRVOLD	0:32:46
	Elisabeth INGVALDSEN	0:36:49
	Birgitte N. HUSEBYE	0:37:52
2	フィンランド	1:48:18
	Reeta KOLKKALA	0:31:34
	Satu M KITAMMI	0:39:48
	Kirsi BOSTR M	0:36:56
3	スウェーデン 2	1:48:26
	Jenny BORGSTR M	0:32:36
	Jenny JOHANSSON	0:38:42
	Cecilia NILSSON	0:37:08
12	日本	2:39:30
	金並由香	0:46:57
	小林啓恵	1:01:15
	落合志保子	0:51:18
13	日本 2	2:50:53
	三好暢子	0:53:32
	高野由紀	0:51:41
	田島利佳	1:05:40

ワールドカップを観戦して

サン・スーシ　尾上秀雄

2 日目のリレー大会を観戦したので、その様子の報告と全体を通じて感じたことを記す。

昨年秋のプレイベントで様子の分かっている会場に到着すると、海外遠征した時にしか味わえないあの雰囲気が、居ながらにして感じられて、今から始まるレースにわくわくする。一方では、このワールドカップのためにずっと準備してきた人たちのことを知っているだけに、何とか成功裡に終って欲しいと願わざるを得ない。大会運営がどんな評価をされるかも正念場だ。

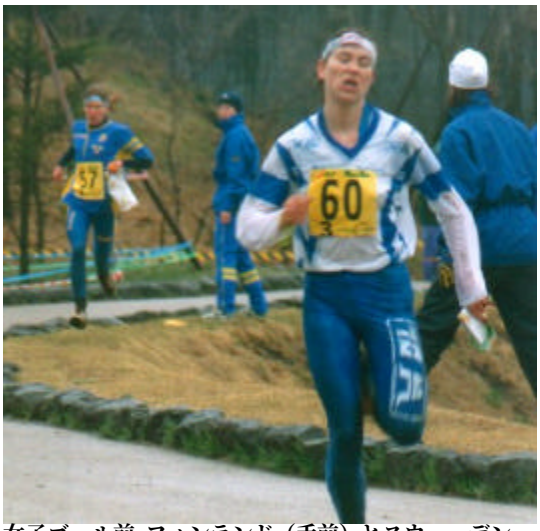
フィンランドのオフィシャルがいたので、「昨日は女子 3 位入賞おめでとう」と声を掛けたらにっこり笑顔を返してくれた。「折角の大会なのに雨模様で残念だ」と言ったら「競技的には全く問題ない」と応えてくれたので何故かほっとする。「今日のリレーの勝算は？」には、「そのために来たのだ」とどこまでも強気の発言。こんなことの言えるオフィシャルになってみたいものだと思う。

デンマークのオフィシャルにも声を掛けた。「地図はどうだ？」と聞いたら「すばらしい！　よく調査されている」とお褒めの言葉。さらに「この会場のレイアウトも良く考えられている。雨だけどドライ（どろどろにならないという意味？）なのも良い」とご満悦の様子。自分では何もしていないが嬉しくなる。いろいろ話している中で「私は昨年の JWOC（ジュニア世界選手権）の日本選手コーチとしてブルガリアに行った」と言ったら「え、私もいたよ」ということで思わずシェークハンド！　世界が身近に感じられる。

男子スタート風景

そうこうしている内に女子リレー1 走のスタート時間になる。日本代表は金並と三好だ。他愛ないことをしゃべっているが、やはり少し上ずっていて緊張しているようだ。どこまで外国勢に食い込めるかの期待を乗せて一斉にスタート。先頭はかなりのスピードだ。日本選手はお決まりの最後尾・・・おっと香港もいるぞ。
周りの人とおしゃべりをしている暇もなく、今度は男子のスタートだ。日本の 1 走は松澤と加賀屋で、これまた結果が楽しみだ。

女子はフィンランドが飛び出す。トップでラジコン通過という放送が入ったので、さっき話していたオフィシャルの方を見ると、思わずガッツポーズをしている。「予定通り？」と聞くとご満悦の様子でウインクしてくる。しかしすぐに真剣な顔になり、少しナーバスになっているような 2 走の選手に、何度も何度もアドバイスをしている。このあたりはどこでも同じだ！　ところが心配していた通り、この 2 走が不調で 6 位まで順位を落としてしまった。オフィシャルもちょっと不機嫌そうになったので、余計なことを言って「一観客の暴言により国際関係悪化」になっても困るので早々に退散した。



女子ゴール前 フィンランド（手前）とスウェーデン

日本チームはまず金並が良い感じで帰って来て、観戦者の応援も一段と盛り上がる。2 走は学生の小林だ。
「これ以上の舞台はないのだから思う存分楽しんで来い」という気持ちで声援を送る。男子は JPN2 の加賀屋が好タイムでノルウェーの選手と競り合って帰って来る。ラスポを取った直後に一旦は前に出たが、最後で一気に抜き返される。凄いスピードだ！
JPN1 の松澤がなかなか帰って来なくて気を持たせる。
走り終った三好が迷いに迷った部分の話をしている。やはり難しいテレインなのだろうか。
やっと松澤から鹿島田へタッチ。ゲート上に群がった応援団の大声援に向かって日本のエースは手を挙げて応え、余裕のあるところを見せる。

鹿島田浩二（日本）

結果は既報の通りである。チームとしてあるいは個人として、得るべきものは得られたのであろうか？ 「結果がすべて」の外国人選手に比べれば、日本人選手は何から何までが成果ではあろうが、今回の舞台に向けて自分が何をやってこれたかを振り返ることも重要であろう。やればできるというのではなく、やろうと思って実際にやってこれたことが何よりも大事なのだ。もちろん次へのきっかけになる結果も欲しいが・・・

会場を走る田島利佳（日本）

今回の日本チームに奇しくも今春のインカレチャンプになった高橋と小林が入っていたことの意味は大きい。若手の２人に直接貴重な経験がインプットされたということはもちろん、現地に居合せた現役の学生にとって日本代表というものを身近に感じさせる効果があったと思う。自分も頑張れば日本代表になれるのだということが夢の目標ではなく、この 2 人を通じて現実的な目標として捉えることができるようになったはずだ。今回のことをきっかけに多くの人がそれを目指して精進することを願うばかりである。

松澤俊行（日本）

表彰されるフィンランド男子

表彰式は更衣室の一角で行われた。やはりどこの国の人でも表彰は嬉しいものだ。プレゼンターの補助役として 3 人の振袖姿の女性が花を添える。入賞の副賞として、背中に祭マークの付いたはっぴが贈られると早速それを羽織っての写真撮影となる。女子の優勝チームはノルウェーだったが、国旗の色（赤と青）とはっぴの色がばっちり同じでとても良く似合った 2 位のフィンランドだけは、最後に逆転負けしただけにその悔しさが尾を引いていた。
村越氏が「これから併設大会を走る人へのアドバイスを」とインタビューで質問したのに対して、スウェーデンの選手が「地図を良く見ること」と言ったのが、やけに印象に残った。

観戦の余韻を感じながらワールドカップにチャレンジという併設大会を走った。M21A クラスに参加した お陰で、世界のランナーが駆け抜けたばかりのコースを走らせてもらえた。精度の高い地図で難易度の高い微地形も何とかこなし自分としてはベストに近いレースだったので、それが世界のトップに比べてどの程度なのか（私の場合はちょうど 170%）が分かって大変興味深かった。また新たな目標設定ができるというものである。

今回は外国選手と接する又とない機会だったが、それを生かした人はどのくらいいたのだろうか？ 会場にいた限りでは日本人オリエンティアにはそれほど積極的な行動が見受けられなかった。もちろん言葉の問題はあるが、オリエンテーリングという共通に理解し合えるものを持っているのだから、もっともっと積極的に話しかけて貪欲に何かを得ようとする人がいても良かったように思う。現に人がしゃべっている時に傍にいただけで、外国の地図をたんまりゲットした人もいたことを付け加えておこう。次回にこういうチャンスがあったら積極的な行動あるのみだ。

大会が終わって一番感じることは、何と言っても今回の運営に携わった人達の努力だろう。そのことに感謝しつつ、今回の舞台を享受した一人としてそれぞれの立場で次にステップに向けて歩み出して行こう。

以上

運営者雑感

ナショナル・コントローラ　村越真

捻挫でレースを棒に振った Gron（デンマーク）は、「suprising quality（驚くべき質の高さ）」と、日本初のワールドカップを形容した。このコメントは、今回のワールドカップに対する各国選手の評価を代表したコメントであろう。だが、その時脇にたっていたアシスタントコンローラのロブ・プローライトは、「not surprising to me（俺には別に驚きじゃないよ）」と答えた。

私も、コントローラとしてトレーニングキャンプから大会に至るまで、何度も選手やチームオフィシャルたちの評価を求めた。彼らのコメントは、拍子抜けするくらい好意的なものばかりであった。たとえば地図に関しては、

「微地形の部分もよくできている。こういうところは調査が難しいことは誰もが分かっているからね。うちのチーム（スウェーデン）の女の子が歩いてモデルを回ったが、何も問題はなかったよ。」

「いやあ、地図に注意してオリエンテーリングをしていた訳じゃないけど、ちゃんとコントロールに着けたから、問題はないんじゃない（ビョルナー・バルシュタ）」

といったコメントがほとんどだった。ただ植生の表現に関しては、「もっと緑にしてもいいんじゃないか（ドルテ・ダール）」「この緑のハッチが実際にはわからない（スウェーデン・オフィシャル）」などのコメントが聞かれた。国際的な地図規定とは

いっても ISOM（国際オリエンテーリング地図規格）はやはりヨーロッパ、特に北欧の地形・植生に合わせて作られている。温帯モンスーンにある日本の植生を表現するのは非常に難しいのだ。

コースに関しても評価は高い。「最初はクラシック、そして微地形と、様々なバリエーションがある。これが本当のオリエンテーリングのコースだよ。僕は細かいエリアに来てミスったんだけどさ（ビョルナー・バルシュタ）」と評判は高い。リレーにしろクラシックにしろ、予想優勝タイムが非常に正確であった点もコースプランニングの質の高さの一つの表れであろう。

クラシックの前日、フィンランドのコーチが、「こんなに地面が柔らかくて、しかも 8.8㎞ もあって、ほんとうに 60 分が優勝タイムなのか？」と詰問してきた。僕の予想は 63 分だったが、そのことは口にせず、「いや、予想される逸脱は 5%以内だ」と答えた。そして翌日スウェーデンのエマ・エングシュトランは 62 分半のタイムでこのコースを走りきった。

素晴らしいのはリレーだった。男子 40 分のウィニングに対して、トップタイムが 39 分 56 秒、女子は 1／2 走のトップタイム予想 32 分に対してやはり 31 分半、そして 3 走の 37 分に対して、36 分 56 秒と、感動的なくらいぴったりだった。世界のトップ選手たちを自分たちの作った脚本通りに演じさせた！そんな感慨がある。

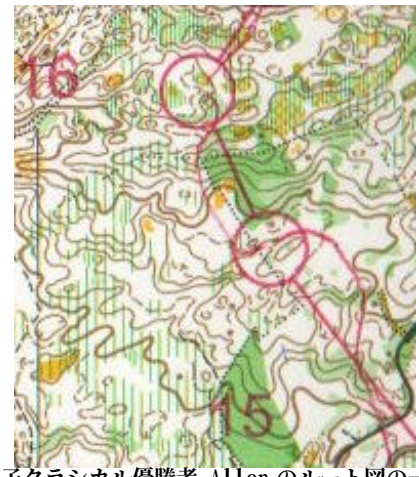
もちろん、レベルの高い脚本をきっちり演じ切れた彼らの能力も賞賛にあたいするものなのだが。ワールドカップでは、競技に関する面も運営面も高い評価が得られたが、そのしわ寄せが併設に来てしまった。プログラムと要項の記述の食い違い、情報提供の甘さ、成績速報の遅れ等参加者の方には随分と迷惑をかけてしまったかもしれない。ワールドカップと平行してやっている点を考慮してくれた参加者たちは、こうした失敗に対して随分寛容であった。この点は非常に感謝している。

また今回の大会を通して、「森の外」の仕事に対して、日本のオリエンテーリング界がまだまだ非力である点が露呈した。

大きなイベントを行うためにどうメディアやスポンサーにアプローチするのか、大きな組織を動かしつつ、地元のボランティアたちに気持ちよく協力してもらうにはどうしたらいいのか。こういう点は今後の課題として残された。

来年 8 月にはワールドゲームズが秋田で開かれる。再び世界のトップたちが集まってくる。そして 2005 年には世界選手権が開催されるかもしれない。今度も更にランクアップして、こうした大会を運営し、また楽しんでいきたいものだ。

次号では、ワールドカップ準備の舞台裏について報告します。



男子クラシカル優勝者 Allen のルート図の一部

この１年をワールドカップのマッピングに賭けた羽鳥和重のマッピングエピソード

「（自分の一次）調査のできはどうだった？」という村越の質問に答えて「よかったですよ。いい原図で調査してるって感じですね」

「村越さん、もう倍時間をかけたらいい地図になるのになあ。間違っているって訳じゃないけど繊細さにかけるよな」　それに答えて、村越「羽鳥はマニアックに細かいけど、全体の一貫性に欠けるなあ・・・」

できあがった地図をうっとり眺めていると、隣で和久田（コースプランナー）が昨年の世界選手権の地図を見ていた。

「見劣りするなあ・・・（もちろん世界選手権の地図が）」さらに一言「村越さん、今度世界選手権をやる時はもっと手を抜きましょう。」